

(朝鮮通信使 2006年2月号掲載記事)

～関釜連絡船100周年の意義～

下関市総合政策部国際課
(釜山広域市派遣職員)
古川 力

2005年の日本と韓国。一方では政治的な対立もありましたが、日韓国交正常化40周年、「日韓友情年」として、日韓のいろいろな地域で数多くの行事が行われました。私が勤務する釜山広域市におきましても、多くの行事が行われ、多忙な一年でした。

その数多くのイベントの一つとして行われた、「関釜連絡船100周年行事」についてレポートしようと思います。

2005年は、「関釜連絡船開設100年」という節目の年でありました。

「関釜連絡船」という言葉は日本人もさることながら、韓国人の方々でも無論知る人の多い名前です。

1905年9月11日に開設された関釜連絡船は、終戦の1945年までの40年間、ほぼ毎日運航されていた定期船舶路線で、最盛期には年間300万人を越える輸送実績を誇りました。日清戦争、日露戦争の勝利によって日本の大陸進出の機運が高まったことによって開設され、釜山を経由して、満州、ヨーロッパへの物流の道を関釜連絡船がつないだ訳です。また、連絡船は民間企業である当時の山陽汽船が開業し、後に鉄道法の施行によって国営となり、1910年の日韓併合によって国内輸送航路となりました。

無論、これは日本の大陸進出という野望の中で開設された路線ですから、多くの韓国人が日本に連行されたという悲しい歴史も持っている訳です。

当時、特に太平洋戦争前後に下関～釜山の間を行き来し、日韓両国の人々の往来は、多くの夢を運んだ一方で、多くの悲しみも運んだことでしょう。日本においては終戦後、在日韓国朝鮮人の方々が故郷に帰るのを断念せざるを得ない状況が生じ、韓国においては韓国人男性と結婚した日本人女性が、自分の国籍や名前さえも怖くて名乗れない時期があったということからもおわかりいただけると思います。



代表的な関釜連絡船、興安丸（こうあんまる）。
1936年就航。総トン数7,103トン、速度23.1ノット、乗客定員1,746名。
世界初の交流電源を搭載、冷暖房を完備。
終戦後は引揚げ船として活躍した。

関釜連絡船は1945年の終戦と同時にその終焉を迎える訳ですが、1970年に日韓両国の期待を背に25年ぶりに「関釜フェリー」（韓国名：釜関フェリー）として復活しました。日本初の国際定期航路として、関釜連絡船の歴史的なバックグラウンドや地理的利便性を生かし、現在も1日1便、夕方双方の港を出港し翌朝対岸到着というスケジュールで運行されています。乗客にとっても大変快適な船旅が楽しめるほか、運行時間に余裕があることから欠航もほとんどなく、貨物船としても非常に信頼度の高いサービスが提供されています。



釜山港で出港を待つ関釜連絡船



下関港に入港中の現在の関釜フェリー

この関釜連絡船開設100周年の記念行事は、2005年8月～9月にかけて、（社）朝鮮通信使文化事業会（会長許南植釜山市長，執行委員長姜南周前釜慶大学総長）からの提案により「交流の海路100年」と銘打ち、関釜フェリー，釜関フェリーの日韓両社のご協力のもと，釜山から下関への便「行きの海路」，下関から釜山への便「帰りの海路」とそれぞれの国際ターミナルにおいて記念行事が行われました。釜山側からは，太平洋戦争の前後に韓国人と結婚して釜山に来たものの日本に戻れず苦しい生活を強いられた在韓日本人婦人の集まり「芙蓉会」の皆さんが下関を訪問，下関側からは，祖国解放後もさまざまな理由で帰国できず，下関で人生を生き抜いてこられた在日韓国人の方々が釜山市を訪問し，お互いがこれまでつらかった過去をねぎらい，両国のさらなる友好交流を「関釜連絡船100年」を機に確認しました。



2005年8月19日、「行きの海路」行事で下関へ向けて釜山を出発する芙蓉会の皆さん（左）
下関へ向かう船の中で和やかにカラオケを楽しむ様子（右）





2005年9月10日、「掃りの海路」行事で釜山港に到着した
民団下関支部の一行を出迎える英尊会メンバーと関係者

関釜両港で行われた行事は、参加者、観衆を全部含めてもそれぞれ100人ほどの小さな行事でしたが、規模の大小ではなく、日本の大陸進出の「道具」であった関釜連絡船が、そのさらに300年前に始まった朝鮮通信使の持つ善隣友好の精神と、現在往来している関釜フェリーに引き継がれているということ、朝鮮通信使文化事業会という韓国の組織から声が出され、異国の地で苦難を味わった両国の市民がお互いを理解し合い、これからの友好を誓った、ということに大きな意味を感じるのです。つらかった昔のことはともかく、今のこの友好関係を継続し、さらにそれを深めていこうという気持ちを持つことが、政治的な問題よりも大きく、大切なことなのだということ、この行事を通じて韓国の人から学んだような気がしています。

下関出身の私にとって、「関釜連絡船100年」という節目をこれらの行事を通じて体感できたことは、日韓友情年2005の行事が政治的な影響を受ける中であって、とても意義深いものとなりました。そしてこれを機に、さらに日韓友好のために今私たちは何をしなければならないのか、私には何ができるのかをじっくり考え、実践していこうと思っています。

(写真提供・協力：釜山広域市、(社)朝鮮通信使文化事業会、在日本大韓民国民団下関支部、下関市)